

青少年の自己変容とユースワーク

インタビューから鑑みるユースワークの価値

The relationship between self-change and youth work.

○石山 裕菜・水野 篤夫

Yuna Ishiyama

(同志社大学心理学研究科, 京都市ユースサービス協会)

Doshisha University, Kyoto city youth service foundation

Key words: youth work, self-change

目的

(公財)京都市ユースサービス協会(以下、協会)は、京都市内に7つのセンターを持ち、青少年に対する居場所づくりや自主的な活動の支援を行ってきた。こうした支援が、若者にとって何らかの役割を果たしてきたと考えられるが、これを検討し、調査と言う形で評価したことはなかった。そのため、2015年度から2016年度にかけて、ユースワーク(以下ワーク)の価値をインタビュー調査により検討することとした(原・松村・勝部・水野・横江・久住・石山, 印刷中)。本調査ではまとめられた報告書の第8章を基に報告を行う。

Erikson, E. H. (1959) は人生を8つの段階に分け、それぞれの段階において起こってくる心理的危機や、重要な対人関係、特徴を示している。彼は、青年期(Eriksonの理論では12歳から20代半ばごろ)において「自分は過去も現在も未来も変わらず自分であり、なおかつ社会の中で受け入れられている」と感じられることが重要であるとしている。つまり青年期は、アイデンティティを確立し、その後の人生の指針となるような価値観の基礎を形作り、他者との関係性を模索する大切な時期であると考えられる。よって本調査ではセンターを利用する(ワークと関わる)ことが、本人の価値形成や、社会における受容感、人間形成にどのような影響を与えたのかをインタビューから読み取り、推察することを目的とした。なお、ワークは若者の変容を目的として行われているわけではなく、変容するから価値があるとしているわけでもないことを断っておく。

方法

調査期間 2016年8月から2016年12月に行った。

技法 半構造化面接法によるインタビューを60分から120分程度行った。

対象者 11名を対象とした。平均年齢は24.73歳(SD=4.11歳)であった。

質問項目 項目は、どのような形で活動センターを利用していたか、人との関わり方はどうであったか、それが、どのような影響を与えたか、どのようなことが印象に残っているか、他9項目であった。

結果と考察

図1は、インタビューから、人との関わりによって、変容が起こったと感じている事例”において、人間関係が広がったと本人が感じ、どのような影響があったと考えているのかを示したものである。

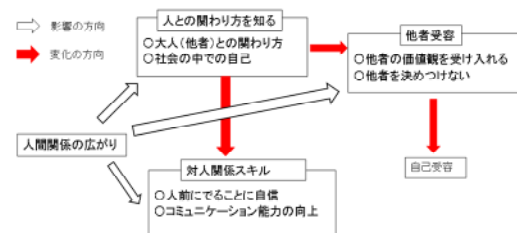


図1 人間関係の広がりがどのように変容へと繋がっているのか

図1より、センターは、“学校や会社にただ通っているだけでは関わることの無いような”様々な価値、背景を持った人々との出会いを若者に提供している可能性がある。

そうした上で、若者が他者や自己、様々な価値観を受容し、さらには自分が社会の中に受け入れられていくという感覚を得る機会をセンターは提供していると考えられる。さらには、学校や会社では出会わないような大人であるワーカーと関わることにより、社会で生きていく上で必要なコミュニケーションを培う場所を提供している可能性があると考えられる。

若者はこうした体験を通して、“自分は過去から未来永劫自分自身である”という感覚や、“自分は何を価値とし、生きていきたいのか” “自分は社会の中でどのように振舞っていくのか”などを考える機会を与え、青少年の自己選択を助ける役割を果たしていることがうかがえた。

引用文献

Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*, New York: International University Press. (小此木啓吾訳 1973 自我同一性 誠信書房)

原未来・松村幸裕子・勝部皓・水野篤夫・横江美佐子・久住祐香・石山裕菜(印刷中) 若者調査報告書(仮)京都市ユースサービス協会